

変革の哲学を求めてーマルクス、エンゲルスの青年時代

2011. 6. 30

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

《前回の第7講義のふりかえり》

- ①ドイツは、18～19世紀、ヨーロッパのなかでは後進国だったが、イギリスやフランスの先進的な思想や哲学は、どんどん流入してきた。
- ②カントやフィヒテ、シュリングなどの哲学者が動的な世界観（弁証法）を発展させるが、ドイツの後進性が背景となって、観念論的側面を強くもった。
- ③ドイツ古典哲学は、ヘーゲルにおいて最高点に達する。その巨大な思想体系は、観念論的性格をもちながらも、その後、多大な影響力をもった。

はじめに：なぜマルクス（1818～1883）とエンゲルス（1820～1895）を詳しくとりあげるのか

- 1) 唯物論と弁証法を統一しながら発展させ、科学的世界観の基礎を築いた
- 2) 資本家の台頭とともに一大勢力に前進してきた労働者階級が、社会変革の担い手と考えると同時に、自らたかひの先頭に立った
- 3) 資本主義は、人類社会のひとつの段階にすぎないこと、経済学の研究をすすめる、資本主義の運動法則の解明をすすめた。

◇今日は、マルクスとエンゲルスが、どのような環境や人間関係のなかで育ち、どのような学びをし、どのように自分たちの問題意識を広げていったのか、2人が本格的に出会う1944年までの歩みを紹介していきたいと思います。

一。マルクスの青年時代

1. ドイツライン州、トリールに生まれる（1818年5月5日）

◇フランス革命の影響の強かった町で

◇環境

* 弁護士の父

・ 当時としては、かなり進歩的な思想の持ち主

* ヴェストファーレン家（貴族階級）との家族ぐるみの交流

・ マルクスの父と、ヴェストファーレンは親密な友人だった。よくマルクスらなどにギリシャ神話やシェークスピアの作品などを語り聞かせてくれたという。

・ マルクスの姉のゾフィーと、ヴェストファーレン家の娘のイエニー（マルクスの4歳年上）は、親友という仲。



2. ギムナジウム（高等中学校）に 12 歳で入学

◇この学校も、フランス革命の影響で、進歩的な教師が多かった

◇さまざまな学問と出会い、学びを深めていく

*文学や歴史、ラテン語やフランス語、数学…。

*フランスの啓蒙思想家たちの著書、ドイツの古典哲学者たちの著書…。

*この頃には、すでに父と対等にヨーロッパの政治のこと、思想家たちの考えやその矛盾点について、語り合っていたという。

◇1835 年、17 歳でこの学校を卒業する

*卒業のさいのドイツ語作文の 3 つの課題

「職業の選択にさいしての一青年の考察」

「アウグストゥスの元首制がローマ国家の諸時代のなかで比較的幸福的な時代に数えられるのは正当であるか？」

「キリストと信徒の合一」

*以下、「職業の選択にさいしての一青年の考察」より（全集 40 巻 515P～）

「神は、人間に最もふさわしい、そして人間が人間自身と社会とを最もよく高めることができるような立場を社会のなかでえらぶことを人間にゆだねたのである。…（略）この選択を真剣に考量することは、人生行路を歩み始めて、自己の最も重要な事柄を偶然にゆだねようとは思わない青年の第一の義務であることは疑いない」

「地位の選択にさいしてわれわれを導いてくれなければならぬ主要な導き手は、人類の幸福であり、われわれ自身の完成である。…（略）人間の本性というものは、彼が自分と同時代の人々の完成のため、その人々の幸福のために働くときにのみ、自己の完成を達成しうるようにできているのである。

自分のためだけに働くとき、そのひとは、なるほど著名な学者であり、偉大な賢者であり、優秀な詩人ではありえようが、けっして完成された、真に偉大な人間ではありえない。

歴史は、普遍的なもののために働くことによって自己自身を高貴なものとした人々を偉人と呼ぶ。経験は、最大多数のひとを幸福にした人を、最も幸福な人としてほめたたえる。…（略）

われわれが人類のために最も多く働くことのできる地位を選んだとき、重荷もわれわれを屈服させることはできないであろう。なぜなら、その重荷は万人のための犠牲にすぎないからである。またそのとき、われわれは、貧弱で局限された利己主義的な喜びを味わうものではない。そうではなくて、われわれの行為は、静かに、しかし永遠に働きながら生きつづけるのである。そして、われわれの遺体の灰は、高貴な人々の熱い涙によって濡らされるであろう」



3. ボン大学へ入学（1835年）

◇トリールからの旅立ち

*すでにこの頃には、イエニーとの愛ははっきりしたものとなっていた

◇父と同じ道として、弁護士という職業も考えていた…法学を学ぶ

*しかし、法学だけでなく、文学や、美学、物理学、化学の聴講届けを出した。

*さらに、ギリシャ・ローマ神話やホメーロス問題とか、近代芸術史といった、マルクスの関心の高い講義も聴いていた。

*しかしやがてそれらの講義の多くに満足できなくなり、聴講を減らし、自分の計画にしたがって独学をはじめていく。これは生涯のマルクスの学問スタイルに。

◇マルクスは、なかなか家族に手紙を出さず、心配させた

*ボン大学時代は、もちろん旺盛な学びをすると同時に、生活はかなり荒れていたらしい。決闘！

*父親はマルクスを心配し、ベルリン大学への転学をさせる

*1年後、帰郷のさいに、イエニーと秘密の婚約をする

4. ベルリン大学（1836年）…18歳のとき、やはり法学部へ入学

◇最初から自分で専門の文献と原典を熟読して評価をくだす学習方法で

*のちには、ほとんど講義を聴くのをやめてしまった

*法律の勉強より、哲学に熱中する

*1837年11月10日 父への長い手紙（全集40巻、3P～）

◇ヘーゲル哲学との格闘

*ドイツ古典哲学、とくにヘーゲル哲学の本格的な研究

・あの難解で入り組んだ理論体系の森に分け入りながら、だんだんとその革新的部分（弁証法的世界観）を自分のものとし、さらにヘーゲルの弱点をも乗り越えてすすんでいこうとする。

*猛烈な勉強のしすぎで、身体をこわす

「私がおまえに求めることは、ただひとつ、学業もやりすぎるのではなく、おまえの体力をたくわえ、そんなにもひどく弱まった視力をたいせつにすることだ。…（略）おまえは、そうであってほしいのだが、おまえとおまえの家族の幸せのために、また私の予想がまちがいでなければ、人類の幸せのために、なお長いこと生きなければならないのだ」

（父からマルクスへの手紙、1836年11月9日）

*ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）との交流と議論

*イエニーに贈った自作の詩集「愛の本・第1部」「愛の本・第2部」「歌の本」

・情熱的なマルクス的一面がよくわかる

・イエニーの苦悩、マルクスの苦悩

*父の死（1838年5月）

◇大学の学位論文（1941年3月…22歳）

- *「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異」
 - ・古代ギリシャ哲学の研究をおしすすめる
 - ・哲学は自由のためにたたかってきた！
- *イエナ大学に提出し、哲学博士の学位を授与される

のちには論敵となるモーゼス・ヘスは、マルクスのことを友人にこう紹介した。

「君は……いま生きている最大の、おそらくはただ一人の本物の哲学者と知り合いになるだろう。その人はまもなく公然と現われ（著作でも講壇でも）、全ドイツの注目を集めるだろう」

「マルクス博士……はまだ本当に若い、最も深い哲学的まじめさと最もしんらつな機知とを結びあわせている。ルソー、ヴォルテール、ドルバック、レッシング、ハイネ、ヘーゲルを一身に統合している人を考えてみたまえ。そうだ、統合しているのだ、つなぎあわせているのではない——マルクス博士とはそういう人だ」（1941年9月2日付、アウエルバッハへの手紙）

◇大学教授になる夢はあきらめる

- *ヘーゲル左派の先輩であるブルーノ・バウアーは、プロイセンの文教政策の反動化によって、大学を追放される。
- *マルクスも、大学教授としての道はあきらめざるをえなくなる

5. ライン新聞

◇最初の政治評論「プロイセンの最新の検閲令に対する見解」

- *なによりも、自由に書く、自由に表現する、言論の自由を大事にしたマルクス
- *徹底的にプロイセン政府にたいする批判を行なった

◇ヘーゲル左派が編集部の主力になっていた「ライン新聞」（日刊紙）

- *マルクスへの寄稿依頼をするように
- *彼の書く評論はたいへん評判がよく、ライン新聞の出資者（株主）たちは、読者を増やして収益をあげるために、マルクスに編集長をするように申し入れる。

◇1942年10月、マルクスは24歳にしてライン新聞の編集長に

- *猛烈な仕事ぶり、検閲との激しいたたかい。革命的民主的な新聞に変貌。購読者数は1568名だったのが、翌年1月には3400名に。
- *論説「木材窃盗取締法に関する討論」。抑圧された貧しい人々の政治的権利を擁護。
- *さまざまな経済的利害がからむ問題にふれ、経済学の本格的な研究の必要性を感じるようになる。
- *「自由人」一派との決別。エンゲルスとの最初の出会いは冷めたものに。
- *この頃、フランスの社会主義・共産主義の思想についても出会っていく

◇ライン新聞への政府の圧力の高まり・・・廃刊への危機

- *1943年3月17日「目下の検閲事情のために、今日をもって『ライン新聞』の編集部からしりぞいたことを声明する」（マルクス、全集1巻230P）

6. フランス・パリへ（1943年9月）

- ◇『独仏年誌』の発行計画、執筆による生計の見通し
- ◇6月19日、マルクスとイエニーの結婚式、ささやかな新婚旅行に

【補論―苦難多き生涯をともに生き、たたかったイエニーについて】

*宮本百合子「カール・マルクスとその夫人」（『若き知性に』所収）

*エンゲルス「イエニー・マルクスへの弔辞」

（1881年12月5日、全集19巻285P～）より

「1843年に、結婚式があげられました。その日から、彼女は夫の運命、仕事、たたかいつき従ったばかりでなく、みずから積極的に、最大の理解をもって、熾烈（しれつ）きわまる情熱をもって、それらをともにしました」

「あれほど明晰な、あれほど批判的な知性、あれほどたのもしい政治的分別、あれほど情熱的なエネルギー、あれほど大きな献身能力」

「他人をしあわせにすることにみずからの最大のしあわせを感じた女性がかつていたとしたら、この女性こそその人でした」

二. エンゲルスの青年時代

1. ドイツライン州、バルメンに生まれる（1820年11月28日）

◇マルクスの生れたトリーアと違い、保守的な町だった

*敬虔派と呼ばれるキリスト教の宗派が、文学や音楽、スポーツ
その他文化的営みを排斥して、節欲の生活様式を説いた。

*聖書万能、科学的知識を否定する説教・・・。

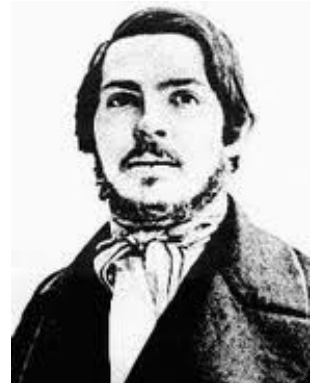
◇名の知られた工場経営者の長男として誕生

*父は、熱心な敬虔派宗徒で、暴君的でもあった。この父とは、
つねにエンゲルスは激突することとなる。

*エンゲルスの20歳の誕生日にゲーテ全集を贈るなどした母には、エンゲルスは
なみなみならぬ愛情を注いだ。

*母方の祖父は、ギリシャ語・ラテン語の教師で、幼いエンゲルスに、さまざまな
昔話をきかせてくれた。ギリシャ神話の英雄たちの活躍に胸おどらせる。自分
をとりまく保守的な世界とは別の世界があることを教えてくれた。

*13歳のときの「おじいちゃんへ」の手紙



2. 学業も、父の命令で中断させられる

◇14歳でバルメンの実業高校をおえ、ギムナジウムに入る

*進歩的な教師も多く、フランス語や歴史や地理や数学など、多くの専門学科には
じめて接し、心おどらせて学習しはじめる。文学的・詩的情操の豊かさも。漫画
もよく書いた。父は、「けがらわしい」文学に熱中する息子を、嘆いた。

*しかし、父は息子のエンゲルスに商売人修行をさせるため、卒業の9か月前に退
学させてしまう。エンゲルスは深く落胆する。

*この頃からすでに、地元の労働者の生活や苦境について思いをめぐらせる

3. プレーメンでの商店員修行（1838年7月…17歳）

◇父の知人の店で貿易事務見習いに

◇2年8か月の修行時代に、はげしい独習を通じて、急速に成長していく

*当時のバルメンに比べれば、きわめて自由で開放的な町だった

*エンゲルスは、余暇の一切をあげて、さまざまな文学や学問を吸収し、そして自分をしばりつけていた宗教への批判的検討に進んでいく。

「僕はヘーゲルの歴史哲学を勉強しているが、これは壮大な著作だ。僕は毎晩、義務としてこれを読んでいる。巨大な思想がおそろしいくらいに僕を感動させる」（エンゲルスからグレーバーへの手紙、1940年1月21日）

*すでにこのときから、ジャーナリストとして頭角をあらわし、判明しているだけで16にのぼる新聞雑誌に詩や文芸評論を発表した。

*商店員として世界各国の新聞をむさぼり読み、25か国の外国語を読めるように

*文学のなかに自由やたかひの精神を見いだしたエンゲルスだが、それは、だんだんと自分をとりまく現実の変革へと転じていく。

*自分自身との激しい思想闘争でもあった

*1939年3月（18歳）執筆「ヴッパータールだより」（全集1巻449P～）

「ドイツ中いたる所に見られるようないきいきとしたたくましい民衆の生活がここではまったく見いだされない。…毎晩浮かれた連中が街路をねり歩き、歌を歌うのを聞くが、その歌というのが、アルコール臭い唇にいつも変わらないのぼってくるまったく低俗なわいせつな歌なのである。…飲み屋という飲み屋は、土曜日や日曜日ともなると、とくにあふれるほどであり、閉店時刻の夜の11時にもなれば、飲んだくれが飲み屋から流れだし、そしてたいていは街路に沿っているどぶのなかに眠りこけてしまって酔いをさますのである。

…この行動の原因は明らかである。なによりもまず第1に工場労働のこれにあずかること大なるものがある。酸素よりも煤煙（ばいえん）やごみをはるかに多く吸わされてしまう狭く暑いところでの労働、6歳にもなればたいてい始まる労働は、労働者の精力と生活の喜びをいっさい奪うにいたった。…驚くほどみじめな状態がヴッパータールの下層階級、とくに工場労働者のあいだに支配している。すなわち梅毒と胸部疾患が、信じがたいほど広まっている。エルバーフェルトだけでも、就学義務のある2500人の児童のうち、1200人は教育を剥奪（はくだつ）されてしまって工場のなかで成長する。これはただ工場主が、成人の代わりに子供たちを使えば、子供にくれてやる賃金の倍額を成人にやる必要がなくなるからである」

「もし工場主たちがこんなひどいやり方で工場経営をしなかったら」

「工場主たちのあいだでもこの敬虔主義者たちはその労働者たちをもっともひどく取扱い、労働者たちの酒を飲む機会をなくさせるという口実をつけて、あらん限りの方法を使って彼らの賃金を切下げ、それどころか聖職者選挙のさいは、いつでも、彼らの労働者たちに賄賂を使う第1人者であるということとは間違いないのだ」

◇妹思いのエンゲルス—その手紙の数々。イラストもおもしろい。

4. 兵役のためにベルリンへ（1841年10月～1842年10月）

◇兵役のあいだをぬって、ベルリン大学の聴講生に

*ヘーゲル左派との交わり。さらなる世界観の前進へ。

*当時、反動的哲学者となっていた、シュリング教授に徹底的な批判をしていく

*この時期にも、はげしい独習を積み重ね、宗教的世界観から完全にぬけてる。

◇マルクスというすごい人間のことを伝え聞き、あこがれをもつ

5. イギリスのマンチェスターに（1842年11月～）

◇父の出資する工場へ見習い仕事に

*この途上、ライン新聞のマルクスに会いに行くが、このときはマルクスの誤解で冷たくあしらわれてしまう。

◇当時、資本主義のもっとも進んだ国で、エンゲルスが見た光景は…

*仕事が終わったあとや休日などに、マンチェスターの街を調査し、資料も読み、労働者の声を直接聞き、労働組合チャーチスト運動などとの交流もはかる。

*マンチェスターの案内役となったのが、その後、エンゲルスの妻となるメアリ・バーンズで、父の工場で働くアイルランド出身の糸巻き女工だった。

*エンゲルスは、マルクスとは違った道を歩いて、マルクスと同じように、経済学の研究の必要を痛感する。哲学を勉強し宗教を克服したヘーゲル左派のエンゲルスは、この資本主義のメッカで、イギリスの古典派経済学などを、マルクスより一足早く読みはじめる。

*そして、『独仏年誌』に経済論文を寄稿する—マルクスとの同盟と友情の開始

*エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（1844年）—事実による告発・若きエンゲルスの情熱ほとばしる名著。ぜひ読んでほしい。

「労働者諸君！ 諸君に私は1冊の本をささげる。そのなかで私は、諸君の状態、諸君の苦しみとたたかい、諸君の希望と展望を、わがドイツの同胞の前に忠実にえがきだそうとつとめた」
（「大ブリテンの労働者階級へ」）

◇労働者階級こそが、たたかひの主役になっていくという展望

「大事なことは、エンゲルスが、労働者階級を描くさいに、ただその状態の悲惨さをいわゆる『哀史』的に描きだすことに甘んじなかったということです。エンゲルスは、この本のなかで、労働者階級あるいはプロレタリアートの気質、相貌（そうぼう）を発展的にとらえることに力をそそぎ、たえがたい窮乏のなかで人類の未来を担いうる階級として成長・発展しつつあることを、彼ら自身の歴史のなかであとづけ、その未来をも力強く展望しました」

（不破哲三『古典への招待（上巻）』新日本出版社、2008年）

6. マルクスとの共同の開始 (さいごは漫画で…)



格差・貧困・抑圧
……



門井文雄原作、紙屋高雪構成『理論劇画 マルクス資本論』(かもがわ出版、二〇〇九年)

次回(7/7)は、「マルクスとエンゲルスが基礎づけた科学的世界観の特徴」

【資料：エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』より】

【諸結果】

「私はこれから、イギリスでは、イギリスの労働者新聞がまったく社会的殺人と名づけたことを、社会が毎日、毎時間、犯しているということ、社会は労働者を健康のままではいられず、長くは生きられないような状態においていること、こうして労働者の生命を少しずつ、徐々に削りとり、そして早ばやと墓場へつれていくことを証明しなければならない」

「都市の人口が全体としてすでに過剰であるとすれば、まず貧民がますます小さな空間へおしこめられていく。街路の空気を汚してしまうだけでは満足せず、1ダースもの貧民がたった一つの部屋におしこめられ、そのために夜間に呼吸する空気は窒息しそうなぐらいである」

「彼らには、粗悪でぼろぼろの、あるいはぼろぼろになりかけた衣服と、粗末で混ぜものが多く消化の悪い食料が与えられる。彼らは非常にいらいらして気分が変わり、不安と希望がしょっちゅういりみだれる状態におかれている」

「彼らは野獣のように駆りたてられ、休息も、安らかな人生の享樂もゆるされない。彼らは性的享樂と飲酒以外のすべての享樂を奪われ、その代わりに、あらゆる精神力と体力をつかいはたすまで、毎日働かされる。そしてそのはてに彼らは、自分の思いどおりになるたった二つの享樂に、まるで気が狂ったようにいつまでもおぼれる。そしてこれらすべてに耐えても、どうにもならないときには、彼らは恐慌の犠牲となって失業し、それまでまだゆるされていたわずかなものさえ、奪われるのである」

「労働者が暮らしている環境をふりかえってみれば、その住居がどんなに密集しているか、すみずみまでどんなに人間がつめこまれているか、病人も健康なものも一つの部屋で、一つの寝床でどのように寝ているか、ということを考えてみると、熱病のような伝染病がもっとひろがらないことの方がむしろ不思議であろう」

「子どもたちは、食物をもっとも必要とするまさにそのときに、必要量の半分しか食べることができず…これらの子どもは必然的にきわめて虚弱で腺病質で、くる病になるに違いない。ひと目見れば彼らがそうになっていることが分かる。労働者の子どもの大部分はほうっておかれる運命にあり、その影響はあとあとまで残り、その結果、働く世代全体が虚弱になっている。そのうえ、この階級の着ているものも適当ではなく、そのため風邪をふせぐことがますます不可能になり、それに気分がすぐれなくても我慢のできるかぎりは働かなければならず、病気になれば家族はますます窮乏し、また医師の援助はふつうまったくうけられない」

「とくに飲酒。あらゆる誘惑、ありとあらゆる欲望がかさなりあって、労働者を飲酒癖へかりたてる」

「労働者は疲れて、ふらふらになって仕事から帰ってくる。その住居はまったく住み心地が悪く、しめっぽくて、不快で、不潔である。彼はどうしても気晴らしがしたくなる。彼には、労働がやりがいのあるものとなり、つらい明日への思いに耐えられるようにしてくれるなにかが、どうしても必要なのである」

「仲間がほしいという彼の気持ちをみたしてくれるのは、ただ酒場だけである。友達と会うことができる場所は、ほかにはない—そういう状態のなかで、労働者は酒を飲みたいという気持ちをつよくもってはいけないのだろうか、酒の誘惑にうちかたなければならぬのだろうか？ むしろ逆に、こういう状態のもとでは大多数の労働者が酒飲みにならざるをえない精神的肉体的な必然性があるのである」

「子どもの身体は頑丈ではないので、低い生活状態の悪影響にたいする抵抗力がもっとも弱い。両親がともに働いているか、あるいは、どちらかが死んでいるときには、子どもはしばしば放置され、その報いはすぐにくる。だから、先にあげた報告によると、たとえばマンチェスターでは、5歳未満で死亡する子どもは上流階級ではわずか20パーセントであり、農村地域では、全階級の平均ですべての子どものうち5歳未満で死亡するのは32パーセント以下であるのに、労働者の子どもは57パーセント以上も5歳未満で死亡するということは、おどろくべきことではない」

「幼児の死亡率を高める要因となっているほかの影響もある。多くの家庭では妻も夫と同様に家のそとへ働きにでており、その結果、子どもはまったくほうりっぱなしになっており、家にとじこめられるか、あるいは家からだされて預けられる。だから、こういう子どもたちが何百人もいろいろな事故にあって生命を失っているのも、少しも不思議なことではない。イギリスの大都市におけるほど多数の子どもが車にひかれたり、馬にけとばされたり、溺れ死んだり、焼け死んだりしているところは、ほかはない」

「こんなに恐ろしい死に方をするこれらの可哀相な子どもたちは、われわれの社会の無秩序と、この無秩序を維持することによって利益を得ている有産階級の犠牲者以外のなにものでもない」

「そしてブルジョアジーは毎日こうしたことを新聞で読みながらまったく無関心である」

「動物のようにあつかわれている労働者がほんとうに動物になったり、あるいは、権力を握っているブルジョアジーにたいして憎悪を燃やし、たえず心のなかではげしく怒っていることによるのみ、人間らしい意識と感情をもちつづけることができるのも、当然のことである。彼らは支配階級にたいして怒りを感じているかぎりにおいて人間なのである。彼らにかけられている首かせを我慢し、その首かせを自分でこわそうとせず、首かせをつけたままの生活を快適だと思うようになるとすぐ、彼らは動物になる」

「労働は彼に精神的な活動の場を与えないのに、その労働をきちんとやっていくためには、ほかのことをまったく考えてはられないほどの注意力が必要とされる。そしてこのような労働—労働者の自由時間をすべて奪い、食うひまも寝るひまも与えず、戸外で運動したり、自然を楽しんだり、まして精神的な活動の時間などはゆるさないような労働—を刑罰として科することは、人間を動物に転落させてしまうことではないだろうか！ 労働者にはやはり、自分の運命にしたがって『よい労働者』となり、ブルジョアジーの利益を『忠実に』守るか—その場合、彼は確実に動物に転落する—、あるいは、できるだけ、抵抗して自分の人間性を守るためにたたかうか、二つに一つの選択しか残されていない。そしてあとの道は、ブルジョアジーとのたたかいのなかでのみ可能である」

「労働者の人間性は、うれしいことに、いたるところであらわれている。彼らは自分がきびしい運命を経験してきており、したがって、不遇な人びとにたいして同情することができる。彼らにとってはどんな人でも人間であるが、ブルジョアにとっては労働者は人間以下である」

【プロレタリアートにたいするブルジョアジーの態度】

「彼らにとっては、この世に存在するものは、彼ら自身をもふくめて、ただお金のためにあるだけである。というのは、彼らはただ金もうけのためだけに生きていて、手早くもうけること以外にはなんの喜びも知らず、お金を失うこと以外にはなんの苦しみも知らないからである。このような所有欲や金銭欲をもっていると、どんな人間的な見方も汚されずに残っているということは不可能である。たしかに、これらのイギリスのブルジョアはよい夫であり、家族のよい一員であり、そのほかにもいろいろな個人的美德をもち、日常の交際では、ほかの国のブルジョアと同じように、上品で礼儀正しいし、商売においてもドイツ人よりも交渉しやすい。彼らはわが国（エンゲルスの地元のドイツのこと：長久）の小商人根性のブルジョアほどうるさくなく、値切ったりしない。しかしこういうことがすべてなんの役に立つのだろうか？ 結局のところ、自分の利益と、とくに金もうけが、唯一の決定的な動機なのである。私はあるとき、こういうブルジョアの一人とマンチェスターの町へいったことがある。そして労働者街のみじめな不健康な家の建て方や、そのぞっとするような状態について彼と話をし、こんなひどいつくり方の町は見たことがないと、断言した。その男は黙って全部聞いていたが、町角で私と別れるときに、こういった、でもここはお金がうんともうかる場所ですよ、さようななら！ イギリスのブルジョアにとっては、お金さえもうかるのなら、労働者が飢えようと飢えまいと、まったくどうでもよいことなのである。すべての生活関係は金もうけという物差しではかられ、金にならないことはくだらないことであり、非現実的で観念的である」

【労働運動】

「労働者は、人間を動物のようにしてしまうこういう状態から脱けだし、もっとまじな、人間的な地位をつくりだそうと努力するに違いない。そしてそのためには、まさに労働者を搾取することそのものうちにあるブルジョアジーの利益とたたかう以外にない。しかしブルジョアジーは、その財産を使って、また彼らの思いどおりになる国家権力を使って全力をあげて自分の利益を守る。労働者が現在の状態から脱けだそうとするやいなや、ブルジョアは労働者の公然たる敵となる」

「すでに見たように、労働者には、その生活状態に全面的に反対する以外には、その人間性を活動させる場が一つも残っていないとすれば、労働者はまさにこのように反対しているときにこそ、もっとも愛すべき、もっとも気高い、もっとも人間的なものとしてあらわれるに違いないということは、当然である」

「こういう抵抗の最初の、もっとも粗野な、そしてもっとも効果のない形態は犯罪であった」

「しかし労働者はすぐ、こんなことは役に立たないということに気づいた」

「労働者階級がはじめてブルジョアジーに敵対したのは、工場の動きがはじまるとすぐおこったような、機械の導入にたいして暴力的に抵抗したときである」

「こういう抵抗もまた散発的なものにすぎず…新しい抵抗の形態を見つけなければならなくなった」

「労働者は1824年に結社の自由を獲得した」

「すべての労働部門において、労働者一人ひとりをブルジョアジーの専制と無視とから守るという明白な意図をもってこういう組合が、結成させた」

「その目的は賃金をさだめること、集団で、力をもって雇主と交渉すること、雇主が利益をあげれば、それに応じて賃金を調整すること、景気がよくなれば賃金をあげること、一つの職業における賃金をどこにおいても同じ高さにたもつことであった。そこで組合は、一般的とみとめられる賃金水準について資本家と交渉し、この水準に加わることを拒否した資本家一人ひとりにたいして、労働を拒否することを通告した」

「たいていのストライキは労働者に不利に終わるのである。そうだとすれば…労働者はなぜストライキをするのか、と問われるであろう。それは簡単明瞭である。それは彼らが賃金の引き下げに抗議し、引き下げの必然性そのものに抗議しなければならぬからであり、また、彼らは人間として、現状に順応するのではなく、現状こそが彼らに、人間に順応すべきだと宣言しなければならぬからである。それは、労働者が沈黙することは現状をみとめることであり、そのことは、好況期には労働者を搾取し、不況期には労働者を飢えさせるブルジョアジーの権利をみとめることになるからである」